

GOLDEN WORLD WEEK 2007 “タンゴとファド”

峰 万里恵(うた) 高場 将美(ギター)

Marie Mine (voz) Masami Takaba (guitarra)

第1部 タンゴ

1

淡き光に *A media luz*

詞：カルロス・セサル・レンシ 曲：エドガルド・ドナート

80年あまり前に大流行し、いまでも世界的にとっても人気のあるタンゴです。作曲家ドナートはヴァイオリン奏者でした。とあるダンス・パーティで照明を消させて、即興で弾きながら作曲した、と伝えられています。即興につくられたのはたしかで、ふつうのタンゴより短いです。とても印象的なメロディ！ 作者は、後に商品や選挙用のCMソングも依頼されました。

レビューの中で女性歌手がうたうために、アブない舞台設定の歌詞が付けられ（そこでタイトルも付いて）、この曲は大ヒットとなりました。時代の最先端をゆく風俗、高級遊女さんの部屋（電話まで付いている！）がのぞけるこの歌詞は、当時の青少年に夢を与え（笑）、善男善女たちもすぐに覚えてうたいました。作詞者レンシは、おもにレビューの台本書きを仕事にしていた人です。



ブエノスアイレスの中心通り、3階ですので、エ

レベーターでどうぞ。入り口に管理人はいないし、お隣りもない。部屋の中はカクテルと愛。——ピアノ、草編みマット、ベッドランプ、お返事する電話と、泣いている蓄音機。そこから流れる古い素適なタンゴ。そして猫は陶器です、ニャーニャー鳴いて恋の邪魔をしないように。

午後はお茶とケーキ、夜はタンゴと歌。日曜日はダンスのティー・パーティ、月曜日は荒廃。お家にはなんでもある。大きなクッションや長椅子いろいろ。薬屋さんみたいにコカインも！ 音を立てない絨毯と、愛の食事向きのテーブル。

そしてすべては半分の明かり、淡い光の下、部屋のなかには、たそがれどき。なんとやわらかいビロード！ 愛の淡い光。

2

酔いどれたち *Los mareados*

詞：エンリーケ・カディーカモ 曲：フアン・カルロス・コピアン

前の曲の少し前につくられました。キャバレーを舞台にした大衆劇の主題歌で、麻薬におぼれている、浮き草人生の若い美女がヒロイン。作曲家コピアンは、エレガントなボヘミアン人生をおくったピアニストです。

タンゴ歌謡が量産されていた時代なので、この曲は埋もれてしまいました。しかし20年ほど後に、バンドネオン奏者で人気楽団リーダーのアニバル・トロイロが偶然この曲のレコードを聴いて、メロディとハーモニーの美しさに感動し、自分も演奏したくなりました。原作者が行方不明だったので（ニューヨークのクラブでジャズを弾いていたらしい）、その親友である詩人・作詞家のカディーカモに新しい歌詞を書かせました。カディーカモは、原作の歌詞も設定も知らずに作詞しましたが、やっぱりキャバレーが舞台になっています。音楽に「なにか」があるんでしょう。



妖しく……まるで燃えているようだった……きみは飲んでいて。そしてシャンパンのはじける音のなかで、狂おしく笑っていた、泣かないために。わたしはきみに出会ってしまったのが、つらか

った。わたしには見えた、きみの両目に、電気のように熱く輝くもの——わたしが、あれほど愛していたきみの目に。

今夜、わたしの女友達よ、アルコールがわたしたちを酔わせた。かまうものか、人があざ笑っても、“酔いどれども”と呼ばれようとも。

いま、きみはわたしの過去に入ってゆく、わたしの人生の過去に。わたしの傷ついた魂が持ってゆく3つのもの——愛、悲しみ、痛み……。

いま、きみはわたしの過去に入る。そしていまわたしたちは、わたしたちの道をとろう。これまで、なんと大きかったわたしたちの愛！ でもそれなのに……ああ……残ったものを見てごらん。

だれにもそれぞれの悩みがある。わたしたちには、わたしたちの悩みがある。今夜、わたしたちは飲もう。なぜなら、もう二度とふたたび、会うことはないのだから。

ラ・クンパルシータ *La cumparsita*

詞：パスクアール・コントゥールシ 曲：G・H・マトス・ロドリゲス 補作：エンリーケ・マローニ

長いあいだ（今日でも？）タンゴ最高の名曲といわれてきました。アルゼンチンの隣国ウルグアイの首都モンテビデオで、大学生グループのカーニバル行進曲として、アマチュア（後にプロとなる）作曲家がつくり、タイトルは「小さなパレード・グループ」という意味です。1917年発表とされます。

先の2曲とほぼ同じ時期に、ブエノスアイレスの大衆演劇に挿入するために、原作者に無断で、第1部のメロディを補作し、全曲に歌詞が付けられたことで、いちやく有名になりました。20年代の末ごろにはヨーロッパでも大流行し、やがては世界のタンゴ楽団のほとんどすべての必須レパートリーになりました。

00

あなたに知ってもらえたら——まだわたしは魂のなかに、あの愛情をもちつづけていることを。

あなたは知ることができるのだろうか？——わたしが決してあなたを忘れなかったことを。あなたの過去をふりかえれば、わたしを思い出すはず。

友だちはもう訪れてもこない。わたしをなぐさめてくれる人はだれもいない。わたしの命の人よ、あなたはわたしの哀れな心に何をしたのだ？

見捨てられたまじしい部屋には、もう朝の太陽も窓から顔をのぞかせない。わたしの仲間になってくれていたあの犬は、あなたが去ってからものを食べず、このあいだひとりぼっちのわたしを見て、やはりわたしから去っていった。

あなたにわかってもらえたら……。

アポロヒーア・タンゲーラ（タンゴ礼賛） *Apología tanguera*

詞：エンリーケ・カディーカモ 曲：ロシータ・キローガ

この音楽スタイルは《ミロンガ》といって、タンゴと同じ原型から分かれたものです。大草原——ブエノスアイレスは港であると同時に、大草原の一隅——の即興・民衆詩人たちが、ギターを弾きながら物語ってゆくためのスタイルです。

タンゴのうたいかたを「発明」した歌手カルロス・ガルデルは、この物語歌の伝統に、濃いブエノスアイレスの空気に加え、町っ子の表現を完成させたアーティストといえます。

作詞家カディーカモは、大草原の牧場の生まれですが、少年時代から首都の夜の街を徘徊していました。

カディーカモに歌詞を依頼し、作曲したロシータ・キローガはタンゴの女性歌手で、ギターも趣味として弾いていました。

★

ヤクザなタンゴ、おまえはひたいに切り傷を隠し

ている。頭から足先まで喪服に身をかため。おまえは悪党のシンボル。靴を強く踏み鳴らして踊りながらゆく。おまえは笑い声、おまえは死神。

おまえに魅せられて、下町娘は盛り場のキャバレーに働きに出た。おまえのせいで、彼女の哀れなおふくろは涙を流す。

すてきなタンゴ、おまえは、人を誘うようなバンドネオンのなかでからだを伸ばし、息も絶え絶えに出てくる。みんなが踊り、呼吸しているあいだに。

タンゴ、おまえは若い娘のエプロンに落ちる涙、街角のガス灯、そしておまえは下町娘の悲しみ。ナイフのように突き刺さる。

場末のメロディ *Melodía de arrabal*

詞：マリオ・バティステッラ & アルフレード・レペーラ 曲：カルロス・ガルデル

歌手カルロス・ガルデルは、1930年代初めに、パリで4本の主演映画をつくりました（パラマウント社）。そのひとつの主題歌です。メロディは、ガルデルの発声の先生だったエドゥアルド・ボネッシ（いっしょの船でパリに来た）がつくってプレゼントしたものです。作品登録はガルデルの名前になっていますが、当時は著作権印税はほとんどもらえなかったのが、どうでもよかったのです。また、ガルデルは原作の細部を変えて、よりうたいやすく、語りかけるように直しています。

作詞のバティステッラは当時パリにいて、無声映画の字幕をスペイン語に翻訳する仕事をしていました。ブエノスアイレスでは、レビューの台本などを書いていました。レペーラはガルデル映画の脚本家ですので、歌詞の監修をしたのでしょう。

♪

月光で銀色に染められた街、ダンスパーティのざわめきが、その全財産。うすぐらい路地で、つぶやいているバンドネオン。いっぽうでは、花のように

きれいな女の子が、コケティッシュに待っている、しずかな街灯の光の下で。

荒くれ者と歌い手たちのゆりかご。言い争いと決闘、わたしの愛のすべてのゆりかご。場末の街よ、おまえの壁に、わたしはナイフで、愛している名前を彫った——この街を出て行ってキャバレーの女になったローサ、金髪のマルゴ、最初のデートでわたしに愛をくれた、あばずれのリータ……。

街よ、おまえは、センチメンタルな雀の、おちつかない魂をもっている。悩み……祈り……やくざな街のすべてが場末のメロディだ。

古い街よ、おまえを思い起こすとき、わたしの目から大きな涙がこぼれるのを許しておくれ。涙は石畳に転がってゆき、おまえに長いキスをする。わたしの心をおまえに与えるために。

空のひとかけら *Pedacito de cielo*

詞：オメーロ・エスポーシト 曲：エンリーケ・マリオ・フランチャーニ & エクトル・スタンポーニ

1940年代のタンゴに新鮮な風を送りこんだ、ブエノスアイレス州の地方の町出身のアーティストたちが合作したワルツです。まずフランチャーニ（タンゴ史上最高のヴァイオリン奏者）の頭に浮かんだメロディがあって、そこにスタンポーニ（ピアニスト）が付け足して1曲が完成。——詩人エスポーシトは、平行して歌詞をつくり、そこからタイトルが決まりました。

みんな20代でしたが、青春への郷愁をうたっています……。



その家の窓格子は、愛の嘆きと歌声で塗ってあった。窓格子も、蔦（つた）も、古いバルコニーも、夜更かしで目の下が黒くなっていた。……思い出す、あのころわたしが、いちばんよくできた詩を読むと、あなたは笑い出した。そしていま、あの詩を読みな

がら、ふたりは泣いている！

たぶんそよ風が冷やしてしまったのだ、あなたの温かい笑い声を、あなたの澄んだ声を。あなたの両目は、こげた砂糖。そこには、太陽に焼けた遠い風景があった。そしていま、あなたは、あのころのように見たいと思っている、愛に震えるブロンズの窓格子を。

子ども時代は過ぎていった。窓格子はあまりの静けさに眠りこんだ。格子に切り取られたあの空のひとかけらに、あなたの喜びと、わたしの愛は取り残された。

年月は過ぎた。恐ろしい年月、呪われた年月！
いまあるのは、やってくるはずのない希望。

最後の酔い *La última curda*

詞：カトゥロ・カスティージョ 曲：アニーバル・トロイロ

1950年代なかばの曲です。ある夜、バンドネオン奏者トロイロ、親友の作詞家カスティージョ、歌手エドムンド・リベロが、トロイロのマンションの部屋で飲んでいたときに、自然にできた曲です。メロディの、ごく短い一部分が前からトロイロの頭にあって、その機会に完成させたくならしたのです。

夜明けごろできあがり、窓を開けて、リベロは道行く人たちにうたって聞かせたとのこと。下の道はブエノスアイレスのシンボルといえる有名なコリエンテス大通りでした。



バンドネオンよ、おまえのやくざな、しわがれた呪いの声が、わたしの心臓を痛めつける。おまえのラム酒の涙がわたしを連れてゆく、ぬかるみが反乱

を起こす場末の暗黒街へ。

窓を閉めてくれ。太陽が、ゆっくりした夢の渦巻きを燃やしている。おまえにはわからないのか？ わたしがいつも灰色の、アルコールの彼方の忘却の国から来たことが。

おまえが受けた刑罰のことを話しておくれ。わたしにだけ教えておくれ、忘却の継ぎ目にこぼれてしまったあの愛のことを。

わたしにはわかっている、こんな酔った説教は、自分も、おまえも傷つけていることを。でもそれはバンドネオンが震えさせる古い愛なのだ。酔いは最後には芝居を終わらせる。心臓に緞帳を下ろして。

エル・チョコロ *El choclo*

詞：エンリーケ・サントス・ディセポロ 曲：アンヘル・ビジョルド

百年あまり前から今日まで、さまざまなスタイルのアレンジで演奏されつづけている、超名曲です。作曲者ビジョルドは、おもに即興歌で人気のあった芸人で、民衆詩人の一面ももっていました。この曲のタイトルは「トウモロコシ」のことで、彼の大好物だったそうです。いちばんよくできた曲だから、いちばん好きなものを題にしたとのこと。彼は歌詞も付けましたが、そこにはトウモロコシは出てきません。ダンス自慢の男がタンゴを礼賛するこの歌詞はその後うたわれません。

時代は流れ、ふたつの世界大戦があって……タンゴ歌手から映画スターになった美女リベルター・ラマルケが、メキシコに行って、スペインから来ていたルイス・ブニュエル監督の娯楽映画『グラン・カシーノ』に出演。そこでうたうために、作詞の大家ディセポロに、新しい歌詞を依頼します。タンゴ誕生をうたったこの歌詞で、この曲に新しい生命が注がれました。



人をからかうような、やくざっぽいこのタンゴとともに、タンゴが生まれ、暗い場末から空に向かっ

て飛び立つ叫びとなった。愛の妖しい呪文がメロディとなり、希望だけを掬にして道を開いた。怒りと痛みと、信じる心と孤独のミックス——跳びはねるリズムのなかで泣いている。

不思議なしらべの奇跡により、場末の女たちが生まれてきた。ぬかるみには月、腰には荒々しいリズム、そして愛するときは野性の激しい想い。

おまえは旗を立てて海に乗り出し、ペルノー酒のなかにパリとブエノスアイレスをミックスした。おまえの仲間にはヒモ、情婦、金持ち男と場末の女の子——スカートと、石油ランプと、ナイフのミサが、移民宿舎の中で燃えあがり、わたしの心で燃えた。

いとしいタンゴ、おまえを思いおこせば、ダンスのステップで中庭の敷石が揺れるのが感じられる。そしてわたしには聞こえる、わたしの過去がひとりごとを言っている声が——おまえの歌声に乗って。

第2部 ファド

1

ちっちゃなマウムケール Malmequer pequenino

詞：民謡（アマリア・ロドリゲス編・補作） 曲：リカルド・ボルジェシュ・デ・ソウザ

マウムケールは、黄色で薫りのよい、親しまれている花です。英語マリゴールド、日本語で金盞花（キンセンカ）。ポルトガルでは、花びらをむしって恋占いに使います。

この曲（？）はポルトガルを代表する民謡らしく、4行詩による歌詞が非常にたくさん伝わっていますが、ここでは、アマリアさんが好きなのを選び、（民謡よりも）ファドにふさわしく改訂したバージョンでうたいます。古くからの長調（メジャー）によるファドのメロディ・ラインを使っています。

アマリアさんのギタリストが借用したギター（ポルトガル・ギター）前奏の作者ボルジェシュ（1860-1930）は、この楽器の独奏者で、録音も残した名手です。この曲には《イダーニャ（女性の名前）のファド》という名前が付いていました。



ちっちゃなマウムケールが、ある日きれいなバラに言いました。「あんたが女王様にしてもらったからといって、そんなに偉そうにしちゃいけません」

風が揺らすポピーたち、あんたたちを見ていると飽きない。なんと美しいのだろう、知らず知らずのうちに素朴なままでいられるということは。

あんたを愛したゆえにわたしは神様をなくした。あんたの愛ゆえにじぶんをなくした。いまはひとりぼっち、神様もなく、愛もなく、あんたもなく。

あの女は罪を犯した。愛ゆえにファド歌いになった。ファドが彼女を、あんまり遠くまで連れて行ってしまったので、神様も彼女を見失った。

2

アイ・モウラリア Ai Mouraria

詞：アマデウ・ド・ヴァレ 曲：フレデリコ・ヴァレーリオ

モウラリアは、ファドが初めてうたわれた地域のひとつです。その中心となるパウマ通りの両側は、19世紀中ごろには、安い貸し部屋のある家が並び、夜になると、軒先の階段に魚売りの女性たちが店を開きました。最初期のファドのもっとも有名な歌手である女性セヴェーラもこの街に住んでいました。この地区は18世紀なかばにはすでにリスボンの売春地帯として知られていました。19世紀には、ファディシュタ（ファド歌い）ということばは、無法者と同義語でした。

この曲は、1945年にアマリアさんのレビュー団がブラジルで公演したときに初演されました。作者たち（レビュー台本作家と音楽監督）も、このカンパニーのメンバー、そしてその以前にもその後も、アマリアさんのために数々の歌謡ファドのヒット曲をつくった人たちです。



古いパウマ通りのあるモウラリア。そこである日、わたしの魂はとりこになった。わたしのそばを通り過ぎた、とあるファド歌いの男——浅黒い顔、小さな口、人をからかうような目つき。

わたしを魔法にかけた男がいるモウラリア。嘘つきだった、でもわたしは心から好きになった。風が悲しい歌のように運んでいってしまった愛。でもいまでも、どんなときも、わたしはその愛をもちつづけている。

軒下でナイチンゲールの鳴くモウラリア。昔ながらのボタンつきの、バラ色のドレス。ああ過ぎてゆく聖体行列。懐かしいセヴェーラの声、すすり泣くギターラのなかで。

3

セヴェーラのファドふたたび Novo fado da Severa

詞：ジュリオ・ダントシュ 曲：フレデリコ・デ・フレイタシュ

マリア・セヴェーラ（1820-1846）は、モウラリアに住んでいたファドの歌手で、色白で可愛く、長身の、たいへん魅力的な女性だったと伝えられます。男性のファディシュタたちに負けない歌手でした。彼女を愛した男性たちの中には、ファド好きの貴族の御曹司もいました。このへんまでは真実ですが、あとは伝説・フィクション……。

のちに文部大臣にもなるダントシュは「セヴェーラ」というロマンティックな小説を書き、それを戯曲（1901年）、オペレッタ（1907年）にもしました。1931年にポルトガル最初のトーキー映画「セヴェーラ」が制作されましたが、この曲はそのためにつくられたのだと思います。フレイタシュは、クラシック音楽の作曲家、指揮者としてポルトガル屈指の存在になりますが、映画音楽の編曲指揮・ファドの作曲などポピュラー界でも活躍しました。

セヴェーラが住んでいたカペラオン通りは、19世紀なかばには、イギリスとポルトガルの船員たちが女性を求めてくる場所で、「汚い通り」と呼ばれていたそうなので、この曲は非常に美化されたイメージ……夢を見ましょう。

なお、ポルトガル語の文語で「ファド」ということばは「運命、宿命」の意味をもっています。この歌詞では、そのことばが音楽ジャンルのファドと意味を重ねて使われています。



ラヴェンダーに縁どられたカペラオン通り。もしわたしの愛するひとが朝早く来るのなら、わたしは地面の石たちにキスしよう、そのひとが道で踏んでゆく石たちに。

わたしの運命は刻印されて定まってしまった、あなたに会ったその時から。おお、わたしのいとしいシガーノ（ジプシー）、わたしの宿命は、ファドと抱き合って生きてゆくこと、あなたと抱き合って死んでゆくこと。

ポルトガルの船乗り *Marujo português*

詞：リナルシュ・バルボーズ 曲：アルトゥール・リベイロ

バルボーズは、アマリアさんがプロ歌手になりたてのころから、彼女に歌詞を売ってきた人です。この曲は、リベイロが作詞作曲してヒットした「レモン売りのロジーニャ」というファドのメロディをそっくり流用して、新しい歌詞をつけました。とてもすてきな曲ですが、可愛い女性ロジーニャちゃんに呼びかける歌詞だったので、アマリアさんがうたうとちょっと変です。そこで彼女向きに、全面的に歌詞を書き直したわけです。

歌詞に出てくるヴァシュコ・ダ・ガマは、16世紀末にアフリカ最南端をぐるっとまわってインドに達する航路を発見した、勇敢なポルトガルの船乗りの英雄です。

Z

ポルトガルの船乗りが道を通るとき、歩いていない。踊りながら通ってゆく。調子に乗って、跳んだりはねたり。それが人体なのか、波に揺れる小舟な

のか判別できません。

リスボンの港に着くと、ひとつとびで盛り場に行っている。そこを船の甲板に変えてしまう。どんなポルトガルの船乗りの中にも、ヴァシュコ・ダ・ガマが宿っている。

派手な身振り、なにかたくらんでいそうな目つき船員のベレエ帽のかぶりかたも、ねじけてる。でも彼が発明する愛撫から、逃げられる女性はいない。

乱れた硬い髪の毛は、船をつなぎとめる錨（いかり）のロープのようだ。そんなところも、魚売りの女たちのお気に入り。

ポルトガルの船乗りが通ってゆくとき、それは危険をはらんだ海が通ってゆくこと。彼は愛情いっぱいにくれあがる満ち潮。

通りの名前 *Nome de rua*

詞：ダヴィッド・モウラオン・フェレイラ 曲：アライン・オウルマン

詩人で、大学で文学の教授もしたモウラオン・フェレイラは、アマリアさんのために数々の歌詞を書きました。いちばん有名なのは「黒い船（暗いはしけ）」でしょう。

作曲者オウルマンはフランス人で、ファドとアマリアさんが大好き。彼女のために、彼女が求めていた、それまでのファドにない新鮮で深いメロディを書きました。

この曲は世界のポピュラー音楽の激動の時代、1960年代のなかばのもので、ファド伝統をかなり離れた曲づくりになっています。歌詞の裏にはなにか現実の物語が隠されていますが、それについてのヒントはなく、聴く人の自由な解釈にまかされている、たいへん不思議な曲です。



あなたはわたしを通りの名前で呼ぶ、リスボンの通りの名前。それは人の名前とはいえない。よく小舟に付けられるような、通りの名前。

少しばかりの苦味と、たくさんの毒をもって、なにかを探し求める人のくるしげな顔と、許す人の笑顔をもって、あなたはわたしを通りの名前で呼ぶ。

静かな通りの名前。夜はそこを通る人はいない。そこでは嫉妬が道しるべ、目標は愛。

秘密の通りの名前。夜はそこを通る人はいない。そこでは、あの詩人の影が、とつぜんわたしたちを抱きしめる。

にがいアーモンド *Amêndoa amarga*

詞：アリ・ドス・サントシュ 曲：アライン・オウルマン

ドス・サントシュはシュール・レアリストの名高い現代詩人でした。彼の詩がアマリアさんによってうたわれたのをきっかけに、ファドの歌詞も書くようになりました。かなりたくさん、そして彼女以外の歌手のためにも作詞しています。

アーモンドはポルトガルの、とくに南部の名産品で、伝統的な名物お菓子もあるとのこと。でも、ほかの種々のナッツ類と同様に、にがい青酸を含んでいるので、多量に食べると死を招きます。どこかで読んだ昔話に、恋人を待ってアーモンドの木の下で眠ってしまい、夜明けになったら息が絶えていたとか……。

C

あなたゆえに、わたしは話す、だれも知らないけれど。わたしは言う——あなたはわたしのアーモンド、わたしのともだち、わたしのきょうだい。家畜

の群れのように押しよせるわたしの愛情、わたしの家、満たされないわたしの庭、わたしの翼。

あなたゆえに、わたしは生きている、だれも知らないけれど。わたしは茨（いばら）と白く薫る小さい花の道をたどりつづける、ふかく激しいやさしさを追い求めて、どこを向いてもアザミに攻められながら。

あなたゆえに、わたしは死ぬ、だれも知らないけれど。わたしは待っている、夜明けの味がするあなたのからだを、絶望の味がするあなたのからだを。おお、わたしの、にがいアーモンド。わたしが望んでいるアーモンド。

川辺の民 Povo que lavas no rio

詞：パドロ・オーメン・デ・メロ 曲：ジョアキン・カンボシュ

現代ポルトガル詩人の代表者といえるデ・メロの詩集「ミゼレレ」（1948年）からの詩です。アマリアさんが、この詩をファドの歌詞にふさわしい長さにちぢめ、みごとに編集しました。そして、メロディ・ラインは、ファドの歌い手カンボシュのつくった《ファド・ヴィクトーリア》という雄大な形をつかってうたいました。

なお、この詩人の故郷であるポルトガル北部では、キリスト教と大地への信仰が深く融合しているそうです。たとえば「神聖なパン」というとき、それは単にこぼの飾りではなく、毎日のパンの粉をこねるときや焼くときにも祈りや儀式がともなっている……もちろんワインも聖体です。



わたしは、みんなの丸いテーブルで食べた。古いほうろうびきの深鍋から、人々の手から手へと渡さ

れてきた接吻を飲んだ。わたしがもらったワイン、澄む切った水、野性の果実。だが人々の命はもらえなかった。

ヒースの生える原の匂い、泥の香りといっしょにわたしはベッドに入り、眠った。わたしもあれの隣泥になっていた。ヒトビトよ、わたしはおまえのものだ、おまえは祭壇の香炉の香りをくれた。でも、おまえの命はもらえなかった。

川で洗うポルトガルの人々よ、わたしの棺にする板を、手斧でけずりだす者よ、おまえに味方する人はいるかもしれない。おまえの聖なる土地を買うものは出てくるかもしれない。だがおまえの命は、だれのものにもならない。

涙 Lágrima

詞：アマリア・ロドリゲス 曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ

アマリアさんは、病床にあって、いつも死と対面していた日々、思うことを詩の形でノートに書きとめていました。その詩に曲を付けてうたうことが、彼女に快復・カムバックへの希望と意欲を与えました。もともと、小学生のころから先生が驚くほど、詩への感応力があり、若いころもファドをつくったことがあったのです。「わたしは詩人なんかじゃありません。でもファドの歌詞ぐらいなら書けます」作曲家ゴンサウヴシュは、晩年のアマリアさんの音楽監督役だったギター奏者です。



なやみにあふれて、わたしは横たわり、さらに増えたなやみとともに目覚める。わたしの胸に居ついたこの気持ち、あなたがこんなに好きな気持ち。

わたしを絶望させるのは、わたしの中を痛めつけるこの罰。わたしは、あなたがきらいと言う。そして夜には、あなたの夢を見る。

いつの日か、死んでゆくことをさとったら、あなたに会えないゆえの絶望のうちに、わたしはショールを地に広げよう。そしてそのまま、まどろんでいこう。

もしも死ぬことによって、あなたがわたしのことを泣いてくれると解ったら、ひとしずくの涙——あなたのひとしずくの涙ゆえに、どんなにうれしく、わたしは命を捨てることだろう。

お聴きいただき

ありがとうございました。

またお会いできるのを

楽しみにしております。

GOLDEN WORLD WEEK 2007

“タンゴとファド”

2007年5月2日

アップリンク・ファクトリー

峰 万里恵 ●うた／選曲・構成

高場 将美 ●ギター／プログラム作成

企画：倉持 政晴（アップリンク）

☞ホームページ☜

峰 万里恵 <http://mariemine.web.fc2.com>アップリンク <http://www.uplink.co.jp>